

かぐらおか

第 30 号

昭和57年1月1日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は前学長 山田守英氏)



(写真撮影 生理学第一講座助手 八幡剛浩)

旭岳から望む北鎮岳と熊ヶ岳

内 容

就任にあたって.....副学長 小野寺壮吉..... 2	バスケットボール講習会..... 7
就任にあたって.....副学長 吉岡 一..... 3	スキー教室..... 7
海外だより フライブルク昨今.....水元 俊裕..... 4	交通事故防止について..... 7
昭和56年度通学方法・居住状況調査結果一覧..... 5	路上駐車禁止について..... 8
研究室紹介.....大熊 憲崇..... 6	課外活動短信..... 8
課外活動報告.....小黒 恵司..... 6	窓外.....天羽 一夫..... 8



就任にあたって

副学長 小野寺 壮 吉

昭和56年7月1日付で教育研究および厚生補導担当の副学長を拝命した。医学部ならびに大学院の学生に関すること、一方では本学中央研究組織の運営の調整といったところが、本来の守備範囲と理解している。医科大学に関する理念を今さら申し述べるつもりはない。すでにあらかたの軌道の方向は定まっていると考えられるので、その上を“どのよう”に進むかということになる。ものごとが円滑に進行するように、せいぜい努めるつもりである。

さて、当面の諸問題についていくつかあげてみたい。関係事務担当者に書き出してもらったところ、たちまち20項目をこえた。

まず急がれることは、定員120名のクラスの臨床実習の方策の樹立である。昭和59年1月からのことであるが、2学年合併授業を含むことから、昭和57年7月にはその大綱が整っている必要がある。7期生の実習の始まる頃は、5期生までが卒業しており、研修医で混みあっている各診療科にとって、多数の学生の受け入れは想像するだけでも大変なことである。現行カリキュラムのままですべてを配置するならば、1グループは8名となるであろう。

教務委員会規程の掲げる審議事項の第一のものは、「医学教育に関する調査研究」である。それにもかかわらず、現実的な事務の処理に追われて、肝腎のこの第一項に該当する件案について十分にかつ継続的に討議する余裕がなかった。そこで、この「調査研究」を主目的とする小委員会ができたのである（昭和56年10月1日）。小委員長は清水教授、委員は笹森、東、久津見、海野、米増の各教授である。そして、清水教授には、昨年12月富士研修所における「医学教育に関するワークショップ」に、御多忙中のところをまげて御参加戴いた。この小委員会からは、教務委員会という機構では十分につくせなかつた新しい展開についての有益な御提言を戴けるものと期待している。

すでに個人用CAI (computer assisted instruction system) が、一般教育(LL)と図書館に置かれており、使用経験をおもちの教官、学生もおられると思うが、本年度は機器センター4階の図書室に、グループ用のものが設置される。CAIにレスポンスアナライザーが組み合わされたものと考えて戴いてよい。学生諸君が自分自身のレベルを知る一つの手段として利用できる。この教材を補充するためには教官各位の御手数を煩わせることに

なると思われるので、この紙面をかりてお願いしておきたい。

いづれにしても、学生諸君には、自己学習の習慣を大いに養って、学年末になって教官を悩ますことが少なくなるようお願いしたい。6年もかければ、よい下地をもった新医師が出現するはずである。歴史の古い大学とは違って、本学の教官数は少ない。卒前教育がスムーズに運ばば、卒後のコースがより充実するのは自明の理である。

さて、本学1期生の卒後の研修も進み、一方大学院医学研究科においても昭和57年度に最初に課程修了者を出すことになる。学位規程、審査実施要領はもちろんできあがっているが、その運用上の細部についてはもう少し詰めなければならない。当面の重要問題の一つである。

この夏の北海道地区大学体育大会の当番大学としての仕事も結構大がかりなものになりそうである。

少し先のことになるが、昭和60年度からは共通第一次学力試験の科目の若干の変更がある。

昨年来一部の学生諸君から生協設立について2回程説明にあずかったが、かくして担当範囲のなかでは、当面の重要課題の陰におしやられてしまう。

教育も研究も理想の姿があるはずである。ときにそれを垣間みるような気のあることもあり、幻であったかと思うこともある。大学の教育と研究について各教官の求める方向にはそれぞれ大きな違いはないように思われる。その方を向いてはいても動いていなければあまり感心できない。重要なのは前進のためのエネルギーであろう。

若い人が育つように、しかも風雪に耐えて成長するように、研究の成果があがり大学の地歩が固まるように、より効果的な組織の運営が望ましく、このため必然的に多くの試行錯誤を伴う。教職員各位・学生諸君の積極的な御協力とそれに伴う忌憚のない御叱正をお願いして、就任半年目の新任のことばにかえさせて戴きたい。





就任にあたって

副学長 吉 岡 一

北海道の医学の先覚者で小児科医のA先生が昔、こんなことをいわれたことがある。「近ごろの子どもは肥育鶏（ひよどり）のようでかわいそうだ。せまい鳥かごとじこめて栄養の高い餌で飼育するので、よく太って肉も軟かい。しかし庭先を走りまわって育った鶏のように、固い歯ざわりもかみしめる味わいもない。」というのである。A先生は今から20年も昔に、いわゆる詰め込み教育の結果について心配しておられたのにちがいない。生徒には次から次へと大量の知識をつめこむ。よく食べよい点を取った生徒はごほうびとして一流校への進学とよい就職先が待っている。しかし食べることを拒否したり下痢をしたりすれば——行くところがない。

頭いっぱい知識をつめ込んだ若者たちは能率よくすぐれた品物を作り出す。昔のことばでいえば産業戦士である。そしてその結果、日本は金持ちになった。新聞の発表する意識調査によると近頃の若者は政治に関心をもたず、体制によく順応し生活態度は受身とのことである。ノーベル賞の江崎玲於奈氏が受賞後「日本は自分のようなものを必要としないと思う。」と語っておられたのが暗示的であった。

今から10年前、娘をアメリカの公立中学校に通わせていた。毎朝子供たちは国旗に向かって忠誠を誓う。授業がはじまると子供たちはテーブルをかこんでガヤガヤやっている。教師はなるべく生徒に自分たちで授業を進めさせ、よくやった生徒をほめ、元気づける。よい成績をとればその課目は上のクラスに移してもらうことができる。飛び級である。成績が悪いと逆にクラスを下げられてしまう。子ども達のよい性質や特徴、芸術的才能などを発見したらば、それをのびしてやるような指導をする。一般教育の達成目標は自分で自分の身のまわりのことができること、自分の考えを他人に表現し理解させること、問題がおこったときにはそれをどう解決するか、のやり方を身につけさせる、などに重点がおかれているように思われる。

知識をたくさんに覚えこませるのがほんらいの目的ではないから、卒業時の到達度も平均をとればそんなに高いものではない。得点能力からいえば日本人の子どもたちのほうが米国の学校ではよく「できる」のである。しかし問題解決能力や、社会人としてのつきあいかたは彼らのほうがおとななのではないか。という気がする。勉強のほうは自分がその気になればあとでだって、いくら出来るのだから。

教育にはかならず二つの面がある。子どもの特質を認め引き出す(erziehen)方向と、子供を社会のしきたりや掟にはめこむ“かたはめ(moulding)”の方向である。それぞれの国の考え方や社会構造によって、この二面のどちらを優先させるかがきまるように思う。

さて、アメリカの医学生は普通の大学を卒業してから入学するので、いわば大学院である。年齢も高くおとなくさい。1～2年は午前中基礎医学の講義、午後は週に2度ほどpatient contactの実習、3～4年になると小グループで臨床各科や関連病院でもっぱらベッドサイド教育を受ける。教育スタッフの数は多く、学生一人に先生一人というような感じである。臨床関係の講義は週に2～3回配属グループ相手に開講するが大教室での系統講義などは行なわないようである。講義はすくないが学生は自分でよく勉強する。ご存知、内科のハリソン、小児科のネルソン、外科はクリストファーなどをすみずみまで憶えていて、たずねると打てばひびくように答えが戻ってくる。医師試験はきびしく、例の多肢選択式の問題が多い。

米国での医師の社会的地位は高い。それだけに求められるものも大きくて当然であろう。一般大学は4年間、卒業後インターン1年とレジデント2年、合計11年が普通医師が出来上がるまでの年限である。そして卒業後もたえず自己研修が要求され、州によっては一定期間で免許の更新を行わなくてはならないところもあるという。医師は医学知識も医療技術も卓越したものでなくてはならないことはいうまでもない。それに加えて広い一般教養と、きびしい科学的方法論を身につけていること、さらに責任感と、患者の魂を救う心のやさしさをもつことが重要な資質とされている。かつて偉大な内科医であったウィリアム・オスラーも学生たちに、ベットの中の時間をさいてシェイクスピア、モンテーニュなどの古典を読むようにすすめたといわれるが、これもアメリカで求められる医師像の一面を示すものであろう。

卓越した識見をもつ医師を必要とすることは米国に限ったことではない。わが国においても名医を国手といって敬った。しかしすぐれた医師は偶然に出来るものではない。不断の研鑽ときびしい精進が求められる筈である。医の道はきびしく遠いと知るべきである。学生諸君の大成を祈る。

* 海外だより *

フライブルク 昨今

水 元 俊 裕

山田前学長先生、諸先生ならびに大河原教授のお許しを得、文部省在外研究員としてこの西ドイツの南西の町、フライブルクにある Albert-Ludwigs 大学医学部皮膚科教室に来てから早いものでもう 3 か月になります。聞くところによりますと、今年の日本の夏、とくに北海道においては風雨による大変な被害を蒙ったとのこと、皆様にはお変わりございませんでしたでしょうか。ここフライブルクは 9 月に入ってから急に木々の葉も黄、赤と色づき、朝晩肌寒い位になりましたが、考えてみますと緯度上は旭川よりも北になりますのでこれも当然かも知れません。当地に来てから知ったのですが、フライブルクは旭川医大とも少なからぬ因縁があるようで、小児科の吉岡教授、ドイツ語の丸子教授および第 1 内科小野寺教授の奥様が留学されたのがこのフライブルクと聞いております。フライブルクは人口 16~17 万の小さな街ですが、しかし環境整備の点では旭川よりもはるかに進んでいるようです。すなわちミュンスター（聖堂）を中心に街並はよく整頓され、緑を豊富に使っております。ミュンスターのゴチック式尖塔は高さ 115m あり、この展望台から街を一望することができます。ミュンスターの周りには広場があり、ここに毎日市がたち野菜、果物、花、肉および土産品が色とりどりに軒先を並べます。またこのフライブルクは旅行案内書に Schwarzwald の南側玄関と記されていますように街の直ぐ背後を Schwarzwald が走っております。Schwarzwald は非常に深い森林からなる丘陵地帯で、僅かに場所をかえただけでまさに多様な風景を楽しむことができます。夏には家族連れの沢山の自動車がこの林間道路を埋めます。それでもフライブルクは西独では南端に近く、比較的気候も温暖な方で冬においても雪が積るようなことはないとのこと。ですからこの街には老人の多いことに気が付きますが、これも老後の生活に暖かいフライブルクを選んで北ドイツの方から集まるからなのだそうです。この老人に加えて目につくのは学生の多いことです。聞きますとフライブルク大学だけで 2 万人の学生を擁しているということです。これは単にドイツ人に限らず、他国からの留学生（中近東、アフリカが多い）を多数受入れているからだそうです。現在日本からの留学生も 200 人位この大学に来ているようですが、大半は音楽家志望の学生のようなようです。なかには哲学ないしは物理学を収めようとしている人もいますが、何れも入学より卒業の方が難かしらしく、既に 4~5 年の潜在を余儀なくされているようです。こ

のようにフライブルク大学は非常に大きな総合大学ですが、その歴史はかなり古く創設は 1455 年 4 月 20 日だそうです。人文学部、自然科学部および医学部の 3 つの主要学部から成りますが、医学部は街の北に位置したところに存在します。ただし小生のいる Hautklinik と neurologische und psychiatrische Universitätsklinik は比較的街の中心に近いところにあります。日本でいう皮膚科学講座はこちらではその名 Hautklinik が示すように皮膚科総合病院という感じで、このフライブルク大学 Hautklinik も 90 床のベットを有し、30 人の医者および 200 人の従業員により構成されております。ですからこの病院長にあたる人すなわち Direktor ともなりますと、もう大変な権威を有しておるようですが、またその仕事も複雑多岐に亘り、多忙な毎日を過しているようです。この Hautklinik においてすら既に 100 年有余の伝統があるといえます。医学部の学生は総数 600 人位といえますから 1 学年平均 100 人位なのでしょう。最終学年になりますと自分の希望により 4 か月位ずつ臨床各科をローテーションし、この間自分の研究テーマを持ち一応卒業論文的にまとめることが義務づけられているようです。一般に立派なヒゲをたくわえている学生が多いようですがその容姿の割には皆真面目に勉強しているようです。隣の neurologische u. psychiatrische Universitätsklinik は流石に大きく、古式豊かな壮麗な建物が森の奥に建っております。他の Klinik については何分離れたところにあるものですからまだみておりません。その中に訪ねてみて何が分りましたらまたお便りさせていただきます。

最近の医療費の重みは西独でも社会問題になっているようです。実際診療点数の高さは日本と比較にならないほどで、さる日本の法律学者がドイツに到着早々子供が破傷風にかかり 3 日間入院しただけで 50 万円の請求が来たという話も聞いております。

ドイツ人は一般に人なつこく（とくに南独では）、とくに日本人とみると親切にしてくれる人が多いようですが、一方現在の世界的趨勢の失業者の増加はこの国においても例外ではないらしく、とくに中年位の世代にはかなりの反日感情を持つ人も多いようです。といえますのは現在西独国内に「日本車排撃連盟」という Bund があって、駐車中の日本車を見ると「なぜあなたは日本車に乗るのか、あなたのその行為が西独経済を悪化させ、また我々を失業させているのだ」と書いたステッカーを

貼って歩いているようです。しかしながら小生のみと
 ころではフライブルク市内における日本車の占有率はそれ程高いとも思えないのですが（せいぜい1～2%でしょうか？）、しかしオートバイについてはこれはもう議論の余地がありません。西ドイツにおいても若者の間でオートバイは大流行ですが、彼等の乗る車の70～80%は日本製です。恥ずかしい話ですが、小生日本のオートバイ製造メーカーは「ホンダ」位しか知らなかったのですが、こちらに来てから「ヤマハ」「スズキ」「カワサキ」もあることを知りました。しかしこの西ドイツには旭川でもみられるような暴走族のような連中はいないようです。

（皮膚科学講座 助教授）

昭和56年度通学方法・ 居住状況調査結果一覧

昭和56年度通学方法・居住状況調査結果をまとめましたので掲載します。

（学生課）

昭和56年6月1日現在

アンケート提出率

学 年	1						2						3						4						5						6						小計						大 学 院						計
	1		2		3		4		5		6		1		2		3		4		5		6		1		2		3		4		5		6		1		2		3		4		5		6		
在籍学生数	127 (10)	132 (8)	120 (9)	101 (15)	105 (12)	103 (4)	688 (58)	14 (2)	18 (1)	10 (0)	42 (3)	730 (61)	126 (10)	114 (8)	97 (9)	78 (12)	91 (10)	64 (1)	570 (50)	9 (1)	8 (1)	2 (2)	19 (52)	589 (52)	提出率(%)	99.2	86.4	80.8	77.2	86.7	62.1	82.8	64.3	44.4	20.0	45.3	80.7												

通学方法のまとめ

学 年 方 法	1						2						3						4						5						6						小計						大 学 院						計																																	
	1		2		3		4		5		6		1		2		3		4		5		6		1		2		3		4		5		6		1		2		3		4		5		6																																			
徒 歩	33 (5)	21 (5)	12 (3)	18 (5)	18 (2)	7 (2)	109 (19.1)	3 (1)	1 (0)	4 (2.1)	113 (19.2)	53 (2)	41 (2)	16 (2)	18 (2)	9 (1)	155 (27.2)	0	0	0	0	155 (4) (26.3)	バス	32 (3)	10 (1)	12 (2)	4 (1)	7 (2)	5 (1)	70 (9) (12.3)	0	0	1 (5.2)	71 (9) (12.0)	バイク	7 (1)	4 (2)	3 (1)	5 (1)	0 (1)	2 (1)	21 (3.7)	0	0	0 (0)	21 (3.6)	自動車	1 (1)	28 (2)	44 (3)	22 (5)	36 (5)	34 (1)	165 (28.9)	6 (1)	7 (1)	14 (7.7)	179 (30.4)	自動車相乗	0 (1)	10 (2)	10 (3)	11 (5)	12 (5)	7 (1)	50 (8.8)	0	0	0 (0)	50 (8.5)	計	126 (10)	114 (8)	97 (9)	78 (12)	91 (10)	64 (1)	570 (100.0)	9 (1)	8 (1)	2 (2)	19 (52) (100.0)

居住状況のまとめ

居住状況	学 年						大 学 院						計		
	第一 学年	第二 学年	第三 学年	第四 学年	第五 学年	第六 学年	小 計	第二 学年	第三 学年	第四 学年	第五 学年	第六 学年		小 計	
自 宅	(1) 21	(2) 20	(2) 18	(1) 10	(1) 9	2	(7) 60	1					(7) 81		
親 戚 又 は 知 人 宅	(1) 1	3	(1) 2		1	1	(2) 8						(2) 8		
下 宿 （光 熱 水 料 込 み）	～37,500		1	1			2						3		
	～40,000													(7) 214	
	～45,000		1				1								(3) 13
	45,001～														
	～37,500		11	4	10	5	(1) 9	12	(1) 5	1	1	2	(2) 10		
	～40,000		29	33	11	(3) 27	(1) 13	7	(4) 120					(1) 28	
	～45,000		(1) 14	(1) 7	9	1	1	1	(2) 33						(5) 62
	45,001～		4	2	2				8						
	～37,500							1	1				0		
	～40,000		2		(1) 1	1	3	(1) 7						2	
	～45,000		2	(1) 1					(1) 3						9
	45,001～		1	(1) 1					(1) 2						
～37,500		1					1					7			
～40,000		3					1	4					2		
～45,000							2	2						(1) 28	
45,001～		(1) 2	(1) 1				(2) 3								(5) 62
～20,000		3		2	2	2	1	10				(5) 32			
～30,000		(1) 5	3	2	4	3	(1) 17	1					0		
～40,000														2	
40,001～															9
～20,000		(2) 2	8	4	(1) 3	(1) 5	(1) 7	(5) 29				2			
～30,000		5	6	(1) 8	(3) 15	6	(7) 49	(1) 2					9		
～40,000		(1) 9	(1) 7	(1) 6	(2) 2	1	(5) 25	1						(1) 12	
40,001～		(1) 1					(1) 1	1							7
～20,000		(1) 3	4	3	(1) 3	(1) 7	3	(3) 23		2	2	2			
～30,000		1	1	3	(1) 6	(1) 6	3	(2) 20					9		
～40,000		2	2	3	7	1	15	1	1	2				(1) 12	
40,001～															7
～20,000				1	(1) 1	1	(1) 3					0			
～30,000		2	1		3	2	8						2		
～40,000		(1) 3		(3) 6	1	1	3	(4) 14	3	3				9	
40,001～				2	1		3	1							(1) 12
～20,000												7			
～25,000													9		
～30,000														(1) 12	
30,001～															7
～20,000						1	2	2	5			(1) 12			
～25,000						1	1	2					9		
～30,000						1	2	3						(1) 12	
30,001～						1		1	(1) 1	(1) 1					7
道 営 ・ 市 営 住 宅				2	1	1	1	5	2	2	7				

() は女子内数 [] は百分率

研究室紹介

■ 皮膚科学講座 ■

大熊 憲 崇

皮膚科学講座は、昭和51年4月に大河原教授の就任により創設され、その当時は教授を含めてもスタッフは4名（水元、岸山、浜坂）であったが、現在は北大から大熊、村田、そして当大学の卒業生が加わり12名に増え、教育、診療、研究に励んでいる。

診療面では、昭和51年11月の附属病院開院とともに診療が開始され、これまでに外来新患数は約8,000名におよび、また入院患者数は500名を越えている。余談ではあるが、当院入院患者第1号は、当科の12ヶ月の女兒（腸性肢端皮膚炎）で、本来は、11月15日から入院患者を受け入れるという病院の方針にもかかわらず、水元助教授が11月8日に無理に入院させてしまった。疾患の内訳はやはり湿疹皮膚炎群が最も多いが、道北、道東地区に皮膚科の専門医が非常に少ないという特殊事情もあり、膠原病、水疱症、代謝異常、悪性リンパ腫、悪性黒色腫などの貴重な症例に遭遇する機会に恵まれている。

研究面では、生化学、免疫、真菌、電顕の大きく4つのグループに分かれている。生化学グループは、大河原教授、水元助教授を中心に、ヒト表皮の糖代謝の研究が行われ、大熊、松尾、日下部、筒井、梶田が属している。大熊、松尾は教授の指導のもと、それぞれヒト表皮のSuperoxide Dismutase, Lysosomal Enzymeの生化学的研究を“加齢と皮膚”という現在の教室のテーマの一部として行っている。将来は、基底細胞腫、扁平上皮癌などの皮膚悪性腫瘍の発生病理にまで迫ろうと頑張っている。日下部、筒井、梶田は、助教授が手がけた実験的角化症におけるビタミンA酸の芳香族誘導体の影響を検討し、糖質代謝系酵素の活性動態、cyclic nucleotideの動態をみることにより、表皮細胞の増殖と分化を司っている因子を探ろうとしている。水元助教授は本年7月から西独Freiburgに留学され、創傷治癒の研究に従事している。免疫グループには、岸山、村田、渡辺が属しており、岸山、渡辺は現在、リール黒皮症、SLEなどにみられる表皮基底細胞の液状変性の発生病機に関する研究、尋常性乾癬の免疫異常を解明するための浸潤細胞の同定などの研究を行っている。村田は、保存皮膚および移植皮膚における経時的变化とViabilityについての研究、局所皮弁の血流変化についての研究などskin surgeryに関連した研究を行っている。真菌グループは、当科非常勤講師の芝木秀臣博士の指導のもと久保が、道北地方における白癬菌の分布と白癬の統計、M. canisの mating などの研究に意欲的にとり組み、道内においての真菌センターとなりつつある。電顕グループは、現在松本一人であるが、北大の熊切講師の指導を受け、来年はウェイン州立大の橋本先生のもとに留学する予定である。現在、先天性表皮水疱症などの皮膚疾患の超微細構造の研究に励んでいる。

また日常の診療に必要な皮膚組織の蛍光抗体法は日下部、渡辺が、免疫学的検査は岸山、渡辺が行い、病理組織学的診断はすべて教授が行っている。

学会発表も、国際学会、国内学会を含め、年間30題を越えるようになり、特に毎年の教授の海外での講演、発表があり、本年から若手も数人お伴できるようになった。また、教授はアメリカでの交友が広く、開講以来、ミシガン大学Voorhees教授、カリフォルニア大学Epstein教授、マイアミ大学Halprin教授などが訪れられ、学生の講義、医局のカンファレンスなどが催され、若い教室員の刺激となっている。

教室員はまだ数が少なく、かつ大半が若く教育、診療、研究に追われている現状だが、合い間をぬってのレクリエーションも盛んで、野球試合、スキー旅行、麻雀大会など毎年企画され全員のびのびと余暇を楽しんでいる。

(皮膚科学講座 医局長)

課外活動報告

陸上競技部

小黒 恵 司

陸上部は1期生によって創部された、医大の中でも最も古い部の1つですが、以降入部者がほとんどなく、1期生が上級に進むにつれ、活動も下火になってゆきました。活動が再開されたのは6期生が入部してからで、以来新入生も毎年1、2名ずつ入部し、現在部員7名（女子1名）に至っています。

練習は短距離・跳躍（4名）、中長距離（2名）、投てき（1名）の3つの部門に分かれて行なっています。最近の陸上競技の傾向として、短距離以外でも、スピードがなければ、単にバネがある、持久力がある、力があるというだけでは好成绩を修められなくなってきており、夏期には、各部門とも専門練習に加え、スプリント・トレーニングを重視した練習を行なっています。冬期練習は翌年の成績を決める重要なもので、筋力トレーニングが主体となりますが、できるだけ屋外に出て、大きな動きをするよう心がけています。このことはまた、単調になりがちな冬の練習に刺激を与えてくれることにもなります。練習内容は毎年同じでは記録は伸びないわけで、年々厳しくなり、その結果、1年生の記録の伸びの著しいのが目につきます。

試合は5月にシーズンが始まって10月に終えるまで、年間10試合程あり、地区体、東医体の他、道内の大会にも積極的に参加しています。部員の増え始めた昭和54年頃から好成绩を修められるようになり、東医体は最近3年間、3位、優勝、2位という成績であり、さらに昭和

56年には全日本医歯薬獣医大学対抗陸上競技選手権でも優勝することができました。

陸上部にとって、最大の目標はやはり東医体です。立っているだけで目まのするような照り返しの厳しいタータン・トラックの上ではし烈な得点争いが展開され、各人、総合優勝を目指し、1点でも多く得点すべく、頭から氷水をかぶりながら走り、跳び、そして投げるのです。部員の少ない学校にとって、1人のつまづきは命取りです。その重圧感に神経を擦り減らしつつ終えた東医体の後には、なぜか結果のことは頭になく、部全体が1つのことを目指したという一体感と、体を使い切った満足感だけが残ります。

陸上競技は地味で面白くないスポーツだとよく言われます。確かに球技のような華やかさ、楽しさはありません。しかし、目標を定め、自らそれに向かって体を鍛え、わずかな前進を積み重ねてゆくことを必須とする陸上競技は、我々に最も原始的な喜びを与えてくれるものではないでしょうか。部員一同、各人の定めた目標を達成すべく、練習を続ける毎日です。 昭和56. 12. 26 脱

(陸上競技部 責任者)

バスケットボール講習会

10月14日(水)午後1時から、本学体育館において、バスケットボール講習会が実施された。

バスケットボール部員を中心とする参加者20名は、講師の旭川バスケットボール協会総務委員会委員長佐崎勲氏、同技術委員会委員長大宮省三両氏による厳しい指導を受け、日頃の練習よりさらに1歩深みのある講習を受け技術向上を図った。

午後4時30分、盛況のうちに講習会が終了した。

(学生課)



スキー教室

12月21日(月)22日(火)の両日に、紋別郡白滝村の北大雪スキー場において、第1学年から第6学年までの学生32名(男子27名、女子5名)が参加し、スキー教室が行われた。

1日目には4名の各指導員ごとに初級班、中級班、上級班(2班)に分かれ、それぞれ基礎から指導を受け、夜にはスキー映画に、皆熱心に目をこらした。2日目は技術の向上と共に自信も深まり、存分に滑り込んでいた。

(学生課)



交通事故防止について

従来から掲示等で周知していますが、道内では交通事故が多発し、中でも青少年(25才未満)ドライバーの無謀運転による発生件数は全体の約33%、死者数は約41%(昭和55年調)を占めています。本学から悲惨な交通事故の犠牲者を出さないためにも、次の点に十分気をつけて交通安全を心がけてください。

1. スピードダウン運転の励行、特にカーブ等での減速と徐行運転の徹底

2. 飲酒運転・無免許運転の禁止

特に飲酒運転は判断力や自制心を失う結果として、次のような危険な状態を招きます。

- ① 運転操作が遅れたり、乱暴になる。
- ② 気持ちが大胆になり、スピード感覚が鈍る。
- ③ 呼吸や脈はくが早くなり、疲労によって強い眠気におそわれる。

3. 夜遊びや長距離運転疲労による過労運転の防止

運転中眠くなったら、車を安全な場所に止めて、車外で深呼吸や軽い体操、また、僅かの時間でも睡眠をとって疲労回復につとめましょう。

長距離旅行で車を運転するときは、余裕のある日程と慎重な運転に徹するよう心がけましょう。

4. シートベルト着用の励行

シートベルトを着用することによって、事故の場合軽傷ですみます。

5. 車両の早め点燈の励行

早め点燈により次のような効果があります。

- ① 歩行者等から自動車が発見しやすくなる。
- ② 接触・追突事故の防止に役立つ。
- ③ 雨や雪の日の視認性が高くなる。

(学生課)



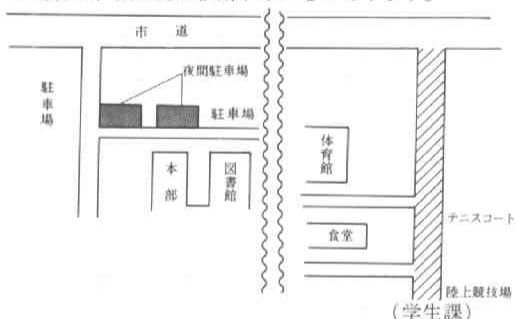
路上駐車禁止について

冬季における構内の路面確保のため路上駐車を禁止します。

特に下図の斜線部分は、除雪及びタンクローリー、緊急自動車、大型バスの通行障害となるので厳につしんでください。

なお、止むを得ず夜間を通じて駐車する時は指定の場所に駐車してください。

違反車両のため、除雪及び大型車両の通行障害が生じた場合は、強制的に移動することがあります。



窓外

天羽 一夫

10月になると暖房は欠かせない。核融合の実用化はまだ無理のようだし、太陽熱も高緯度地帯では効率が悪そうだ。石油タンクの目盛が減るのを恨みしげに見ながら新聞の中東情報に一喜一憂どころか全憂する毎日である。昭和初期の冬は余程モダンな家庭を除けば火鉢に炭と相場がきまっていた。僅かに石炭が風呂と学校のストーブに使われていただけで、石油が家庭に普及したのは戦後であった。それがアツと云う間に暖房の熱源、航空機の燃料をはじめとして石油化学に不可欠のものとなって便利になった反面、吾々庶民の生活を圧迫するようになった。石炭、石油は化石燃料と呼ばれる一方、有機化学の発展と共に人類には不可欠の物質としての地位を確保した。

書斎の棚に灰白色の殻に薄茶の縞模様を持つ超特大のデンデン虫形のオーム貝を置いてある。以前に行ったセレベス海産のものだが生きた化石の一つで、5億年前のカンプリア期に三葉虫と一緒に海底に棲息したものである。三葉虫が多数の種類に分化して消滅したのに、オーム貝は僅かに3種(一説には6種)にしか分化せず、殆ど原形のままで現存する種属である。北海道夕張の白亜期地

課外活動短信

空手道部

※ 全道学生空手道大会新人戦 団体ベスト4

※・8 和道会全道大会 団体ベスト4

バレーボール部

※～11 北海道大学バレーボール秋季リーグ 4部優勝

※ ヶ 入替戦 樽商2-0旭医

弓道部

11月全道学生弓道争覇戦 小村好弘優勝

ボディビルディング

12月新入戦 団体優勝

写真部

8月撮影旅行(道東)

※2～16 第7回旭川写真連盟展出品(4年服部)

※6～※冬の写真展(ロビーにて)

棧敷文の会

※、※、※、※、※、※、※、※、※ 例会開催

映画研究会

※ 上映会「ペーパームーン」「第3の男」

※ 上映会「どですかでん」

層(デボン期)にみられるアンモナイトはオーム貝から分化したものと推定されるが、それまでに1億5千万年も要したが巨大な形のものを作り出した途端に突如絶滅した。アンモナイトも勿論海生動物でデンデン虫形の一般的なものからタツノオトシゴ形、センニン貝形、日本に特有なミズ貝形のものまでが示準化石として産出し、夕張にはその博物館があるという。この時代はまだ植物は繁茂せず海辺では白鳥の好むというアマモ(藻塩草)の祖型のコダイアマモソウがあって、その化石は阿讃山脈で見ることが出来る。一方陸生植物もトクサ類の化石しか発見されていない。

石炭期はデボン期に続く3億年前でシダ、鱗木が繁茂すると共にサンゴ類、ウミユリ類も栄え、石炭層にはこれら動植物の化石が多量に共存し、石炭生成の根原となったものと推定されている。

一方石油の起源は明瞭ではないが、海の生物で特定の動植物と限定されず、むしろ量的に多い珪藻が沈澱し嫌気菌の作用と加圧によって数百万年かけて生成されたと考えられている。

6,000万年前に食虫亜目が分化し、100万年前に猿人が出現したのに較べると無限の時間をかけて生成され貯蔵された地球の産物を、同じ産物の人間が新世代第4期にあまりにも無雑作に消費するのは、後世から地球破壊時代と呼ばれても仕方があるまい。今更時を他種属と共存した時代に戻せなどと叫ぶ積りはさらさら持たないが、化石生物や絶滅した種属を見聞するとき日常の雑事を忘れて、地球のエコロジーを静かに考えるひとときを持ちたいと思う。

(放射線医学講座 教授)